広島県立広島第一中学校の被災状況について

県立広島第一中学校（広島一中・現在の県立広島国泰寺高等学校）は、県内随一の名門校として多くの少年たちの憧れでした。

あの朝、広島一中の一年生は学校に登校し、奇数組は近くの雑魚場町ですでに建物疎開作業を開始していました。偶数組は、教室内で待機し、交代の準備をしていたのです。

外にいた奇数組は全員が死亡。偶数組も校舎倒壊の下敷きや火災のため犠牲となり、辛うじて逃げ帰った者も強烈な放射線の影響を受け、その多くが亡くなりました。広島一中生は上級生も含めて 353 人が犠牲となりました。

（写真上及び右）　昭和初期の本館・講堂　提供：鯉城同窓会

中国配電本店から見た原爆投下後の県立広島第一中学校。中央下に今も残る門柱や記念碑が見える。撮影：H.J.ピーターソン　提供：広島平和記念資料館

ユーカリの大樹も本館・講堂、校舎は全て焼け果てた。しかし、正門の門標は、戦時金属供出のため、大理石に改められていたので無傷だった。

父母らによる追悼記『星は見ている』について

被爆の翌年に広島一中遺族会が結成され、焼け跡の校地にバラック建ての校舎とともに碑が建てられました。昭和 23 年（1948 年）には、追憶の碑が建立されています。

原爆により犠牲となったわが子をしのぶため、昭和 29 年（1954年）4 月に遺族による追悼集『追憶』が刊行されました。ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験で被爆した第五福竜丸事件がきっかけとなり、「原水爆禁止運動」が広がりを見せる中、この『追憶』が全国的な週刊誌に取り上げられて大きな反響を呼びました。9 月には、そのうちの何篇かを抜粋して『星は見ている』と題して出版され、多くの人の涙を誘いました。

この『星は見ている』はその後幾度も再刊され、現在まで多くの人に読み継がれています。

開館時間　12月～2月　8:30～17:00
3月～11月　8:30～18:00
（8月～19:00　5日・6日～20:00）

休館日　12月30日、31日

入館料　無料

交通案内　ＪＲ広島駅（南口）から約 20 分
・バ　　ス／広島バス吉島方面行で「本通り」または「平和記念公園」下車
・市内電車／紙屋町経由広島港（宇品）行で「本通」下車
宮島口・西広島・江波行で「原爆ドーム前」下車

駐車場はありません

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

お問い合わせ先
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館　〒730-0811　広島市中区中島町1番6号　TEL 082-543-6271 FAX 082-543-6273
ホームページ　http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/

当館では、被爆体験記と原爆死没者のお名前・遺影を収集し、公開しています。企画展では、被爆体験記を中心に、当時の写真、関連する資料などを展示し、特定のテーマから被爆の実相に迫ります。被爆体験記や原爆死没者のお名前・遺影をお寄せください。皆さまのご協力をお願いいたします。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館　企画展

星は見ている

全滅した広島一中一年生・父母の手記集

入場無料

広島に投下された原子爆弾は
多くの幼い命を奪いました
一九四五年八月六日早朝
広島の街には、炎天下で作業する
子どもたちの姿がありました
入学したばかりの一年生は
爆撃からの延焼を防止するため
防火帯をつくるという建物疎開作業に
従事しており、多数が犠牲となりました
この作業に多くが従事していて
犠牲となった
愛するわが子を失った
広島県立広島第一中学校の遺族が
思いを込めて綴った『星は見ている』
この追悼集を題材に
原爆が落とされる前の家族はどうだったのか
原爆がその家族に何をもたらしたのか
どのようにして
何を訴えて亡くなっていったのか
そのとき、家族はどうしたのか
突然に目の前から消え去った
わが子への思いを感じていただきます

期間　平成30年
1月1日（月）～12月29日（土）

時間　12月～2月 **8:30～17:00**／
3月～11月 **8:30～18:00**　8月～19:00（5日、6日～20:00）

会場　国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
情報展示コーナー（地下1階）

作者.ササキ

子を亡くした父母等を中心に広島一中関係者が慰霊塔に集った。1946年8月　提供：秋田正洋氏

秋田正之さん（父・広島一中遺族会会長）の追悼記より

秋田耕三君（3年生　奇数組　土橋の建物疎開作業中に被爆）

広島一中入学後に本人が描いた自画像

工場は、死体収容所になっていた。プーンと人の肉の腐る臭いの中で、五、六十人がうめき叫んでいた。誰の顔も目茶苦茶にくずれている。人間の形相というものはない。「色の白い子です。足の白い子を呼んでみましょう」という妻と一緒に、耕三！　お父さんです。一中の秋田耕三！　お母さんです。秋田耕三はいませんか……とあたりをかけまわった。せめても生きていてくれという願いで、一杯であった。

その時、「お父さんですか？　お母さん」という耕三の声であったが、それはすでに、若い少年の生命が消える最後の声であった。

秋田耕三君の帽子　寄贈：秋田ハルヨ氏　所蔵：広島平和記念資料館

長喜美子さん（姉）の追悼記より

長博幸君（1年生　偶数組　校舎内で被爆）

運命のあの日、八月六日、筆にするさえ厭わしい呪いの日。書きたくない。しかし、十四才で世を去った博幸の最期の日を、やはり私は敢えて書かなければならない。

博幸は国防色の学生服にゲートル。「お母様これ舟みたいだね」と笑わせた母の手製の靴に、戦闘帽を目深くかぶり、疎開家屋の奉仕作業があるからと、お弁当をおむすびにして貰って、嬉しそうに「お母様、僕の部屋散らかっているから、後をよろしくお願いします」と挨拶して出て行った。玄関のポーチのところで、誘いに来られたお友達がかくれていたとかなんとか云って、大さわぎしながらかけて行った。そしてお友達も博幸も、それきり二度と帰らなかったのだ。

一中1年生佐々木一彦君の布製の靴　寄贈：佐々木綾子氏　所蔵：広島平和記念資料館

檀上貞子さん（母）の追悼記より

檀上竹秀君（1年生　偶数組　校舎内で被爆）

校舎の下敷きになった瞬間、夢中で足にさわったものをけりあげ、肱で瓦を割り、やっと出られるくらいの穴を造って、竹秀が一番にはい出し、次々に出て来る人を引っ張り出してあげたけど、出るとすぐ死んだ人もあったそうです。

（略）

そのうち下痢がおこって大変心配致しましたが、幸いにそれも止まり、果物、とくにトマトを、非常にほしがりましたけれど、なかなか手に入らず、近所で御無理をお願いしてやっと分けていただくと、そのトマトをむしゃぶりついて食べました。

藤野としえさん（母）の追悼記より

藤野博久君（1年生　奇数組　雑魚場町の建物疎開作業中に被爆）

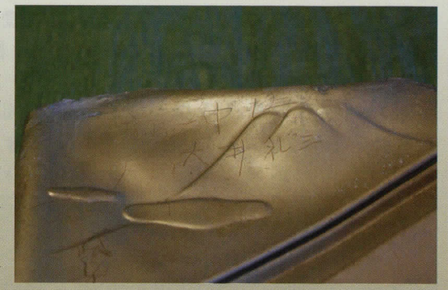
前の夜、博久はどうしてあんなに星のことをいい出したのだろう。私の胸には、博久の一つ一つの言葉が、痛いほどの思いで迫ってきました。美しい星空は、前の夜とすこしも違っていないのに、地上は、一夜で変り果てた焼野原となっています。そこには辛うじて生命を保っている人の苦しみうめく声が充ちていました。戦争はやめてほしい、戦争はやめてほしい、戦争というものはこの地球上からなくしてほしいと子供が前夜語ったことを、追憶して見ました。あの言葉は、十四歳の少年の言葉ではない。神の言葉だと思いました。

1944年冬の藤野家家族写真　（左端）藤野としえ氏　（左から3番目）藤野博久君

大井孝三さん（兄・広島一中3年生）の追悼記より

大井礼三君（1年生　偶数組　校舎内で被爆）

そこは燃えつき明治初期に建設された校舎の太い梁りも黒く焼けて、歩くと地面は温かく黒いそして白い煙が立った。教室内には白骨となった一中生徒の骨が何十体と横たわっていた。その間を手を合わせながら何か手掛りはないかと探し求めた。学級の中ほどに一つの弁当箱を見つけ手に取ってみるとアルミの蓋に一年生、大井礼三とほり込んであった。蓋を開けると白い湯気が立ち昇った。ご飯の表面は黒く焦げて炭になっていた。しかし、その炭を動かすと下には白米の真白いご飯が表われ、まだ温かい手ざわりがあり白い湯気を出し、何かを語りかける様でもあった。


大井礼三君の弁当箱　所蔵：大井節子氏

宇都信さん（父・陸軍共済病院）の追悼記より

宇都桂三君（1年生　奇数組　雑魚場町の建物疎開作業中に被爆）

桂三のところへ婦長とともに馳けつけてみると、もう強心剤注射の効もなく、彼の最期の脈に触れることも出来なかった。枕を並べてねている妻の語るには、桂ちゃんは、「もう、僕は助からん、先に死ぬから母ちゃんは助かって下さい」というから、「しっかりしなさい、頑張りなさい」といっている間に、悲壮にも元気な声で、「父ちゃん、父ちゃん」と強く高く叫んで、たったいま息が絶えた、というのである。

広島陸軍共済病院　撮影：米軍　所蔵：米国国立公文書館

堀輝人さん（父・中学校教師）の追悼記より

堀弘明君（1年生　奇数組　雑魚場町の建物疎開作業中に被爆）

軍医がかけまわっているが、なかなか手は行きとどかない。うめき叫ぶ生死の境をさまよう群衆の中を、私は狂人の如く「一中の生徒はいないか」と絶叫して尋ね廻った。「ハイ、私は一中の生徒です」と、多数の患者の中からムクムクと頭をもたげて答える者が何人かいた。いずれも人間の姿とは思えぬ変り方で、ほとんどパンツ一枚のあわれな姿であった。火傷をしていない生徒は、ひどい打撲傷で足腰が立たない有様である。

堀弘明君の半ズボン　寄贈：堀輝人氏　所蔵：広島平和記念資料館

※体験記は昭和29年（1954年）に書かれたものもあります。かなづかいやおくりがな等、現在の用法と異なる場合がありますが、原則、原文のまま掲載しています。